



人生を変えたことば

母は、50歳の時、仕事場から救急車で運ばれた。脳梗塞だった。後遺症で右足が全く動かさず、軽度の言語障害も残った。ずっと働き続けてきた母にとって、信じられない出来事だったろう。医師は「寝たきりになる覚悟をしてください」と告げた。

両親は離婚しており、高校卒業後、私は一人で生きていくために、看護師の資格を取った。そして、働いて3年目のことだった。内緒にしていたが、母の肺に影が見つかった。肺がんだった。正直に言おうと、当時、私は母が嫌いだった。それでも、私は毎日、母の所に通った。さまざまな思いが交錯し、葛藤する中で、私は何も告げず、見舞い続けた。がんばりやの母は何も知らず、リハビリに励んだ。ベッドの上でのリハビリが終わり、

車いすに移行になった時だ。母が、笑顔で私に言った。

「ねえ、車いすの使い方を教えて」
言われた瞬間、私は即座に答えていた。
「一生乗るつもりなら、教えてあげるよ」

看護師として言ったのか、家族として言ったのか、覚えていない。回復の過程で一時的に車いすを使うことはある。ただ、分かっていたのは、この段階で甘やかせば、回復が遅れてしまうということ。ある意味、看護師をしてきたからこそ、家族として言えたことば……。なのかもしれない。

それから1カ月。寝たきりと言われた状態から、母はついでで歩けるまでになった。医師は、母のレントゲン写真を見て「奇跡だ。これは本当にあなたですか」と言った。

その後、肺がんの手術も無事に終え、今も再発はない。右まひは少し残るものの、日常生活に支障はない。今でも母は言う。私のあの一言があったから、自分の可能性を信じることができた。あの一言で「そうか、歩けるんだ、諦めちゃいけないんだ」と、ふに落ちた。

自分の一言で、大事な家族の人生を変えることができたこと、「あなたのおかげ」と言ってもらえたことが看護師としての誇りだ。ありがとう。こんな幸せなことはない。

〈東京都〉小林 加代子 37歳
こばやし かよこ